

「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

萩野 綱男

1984年12月号

私は、数理科学 No.258 (1984.12) に「敬語の丁寧さを決定するもの」という論文を書いた。内容は、「丁寧さの数量化」の手法で自由回答データを分析して、日本語の敬語表現のどういう部分が丁寧さに関わっているのかを明らかにしたというものであった。

それから30年経った。今の時点で30年前の研究を眺め、現在とこれからの研究を展望してみたい。

第1に、私が30年前に示した「丁寧さの数量化」の手法であるが、この計算法は以前からすでに知られている計算法であった。その名を「交互平均法」(reciprocal averaging) という。交互平均法は、小林¹⁾の pp.137-144 に説明されている。同書によれば、この計算法はすでに1930年代に考案されているようで、Hill²⁾によって交互平均法と名付けられたようだ。交互平均法は、数理的研究では、対応分析 (correspondence analysis) の名で呼ばれるとある。計算法自体は自分でオリジナルに考案したものであったが、数十年も前にすでに同じことを考えた人がいたわけだ。

第2に、このようにデータに徹底的にこだわって、そこから言えることを数量的に確認して、敬語に関する知見を得るタイプの研究は、その後新たな発展を見せていない。私は今でもこのような考え方をしており、その方法でこれからもデータを分析していくつもりであるが、同調者はほとんど出ていない。

なぜそのようなことになっているのか。敬語研究は言語研究の一分野であり、人文系の一部とみなされる。人文系の研究者は、数学(数理科学的な考え方)にうとい人が多く、数式が出てきただけで身構えてしまったり、自分とは無関係なものとする傾向がある。このような感覚的な問題を解決することはむずかしい。私は、現在国文学科で日本語学を教えているが、学生たちに少しでも数学的なものを見方をするように方向付けをしている。数学的な内容であっても、それをかみ砕いて、人文系の学生がわかるように話をしなければならない。そのような努力を継続することで、一般の



人文系の人でも理解できるし、理解してみれば何もむずかしいことをいっているわけではないことが納得してもらえよう。このあたりは、もしかすると私の一生の宿題なのかもしれない。

参考文献

- 1) 小林四郎, 『生物群集の多変量解析』, 蒼樹書房 (1995).
- 2) Hill, M.O., Reciprocal averaging: An eigenvector method of ordination, *The Journal of Ecology*, Vol.61, pp.237-249 (1973).

(おぎの・つなお, 日本大学文理学部)